手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報
2021 年 3 月 31 日
第 44 号

手賀沼が海だったころ

2020 年 10 月 18 日　アミュゼ柏で開催

歴史講演会 「原胤昭と手賀原氏」

1. 新型コロナ感染防止を考慮して講演会開催

さる 2020 年 10 月 18 日(日)10 時～12 時、アミュゼ柏のプラザにおいて、当会は歴史講演会「原胤昭と手賀原氏」を開催しました。講師はおなじみの柏市教育委員会　高野博夫氏です。高野氏には、今までも 2 回ほど講師をお願いしたことがあります。

原胤昭は幕末の頃の与力で、明治以降はキリスト教を信仰、刑余者支援など様々な社会事業を行いました。この講演では、原胤昭がキリスト教に入信するきっかけになった、江戸初期にキリシタンとして処刑された原氏宗家の原主水のことや原胤昭の事績、手賀原氏、手賀城を中心とした手賀地域の歴史について、詳しく語られました。

なお、当講演会は 4 月 29 日に開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会場が使用できなくなったため、延期しました。

今回、新型コロナ感染予防に配慮し、受付机はビニールで仕切りがあり、アルコール、体温計持参で受付なども行い、椅子は 1.5m来場者、講師も皆マスク姿と、例年にはない講演会となりました。

＜受付の様子＞

＜講演して頂いた高野氏＞

2. 当日講演会の様子など

原胤昭は、江戸時代最後の町奉行所与力で、明治になってからキリスト教に入信、十字屋書店を経営したり、原女学校（現在の女子学院の前身）を創設したりしましたが、自由民権運動に呼応して福島事件を題材にした社会風刺の出版をしたために投獄され、それがきっかけになって刑余者の支援活動を行い、日本最初の教誨師になりました。

キリスト教に入信したきっかけとして、先祖筋にあたる原主水が、徳川家の直参の家臣だったのが、キリスト教に入信したために弾圧をうけ、ついには処刑されたことを知ったことにあるといいます。

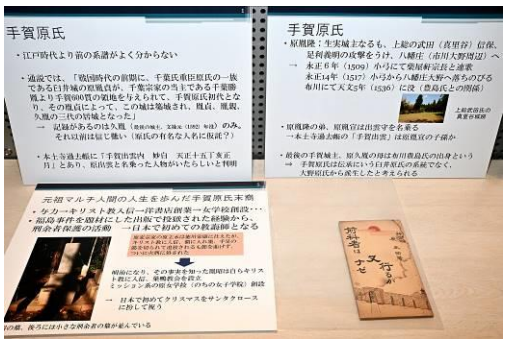
＜史料を示す高野氏＞

原胤昭は手賀原氏の子孫でしたが、先祖所縁の手賀に何度も訪れました。　手賀は、手賀沼南岸の手賀城という手賀原氏の中世城郭があった地域で、興福院、兵主八幡神社など手賀原氏の伝承のある寺社もあります。その手賀の原氏墓所には、原胤昭の墓が沢山の刑余者の墓に囲まれてあるのです。

＊＊＊＊＊

会場であるアミュゼ柏プラザには、熱心な受講者が集まりました。

講演会には、今までも東京都内、神奈川県内からの来場はありましたが、今回遠く茨城県の太平洋岸に近い場所から、数人の方の来場がありました。



＜当日会場での展示＞

3. 講演会の内容（投影資料より）

手賀原氏の歴史
① はじめに～原胤昭～
② 原胤昭と手賀
③ 臼井原氏
④ 手賀への進出
⑤ 手賀原氏の系図
⑥ 手賀原氏の遺構
⑦ おわりに

① 原　胤昭
・ 最後の江戸町奉行所与力
・ カロゾルス師によって洗礼（明治7年）
・ 自由民権運動に肩入れ，逮捕
・ 石川島監獄に投獄
・ 出獄後，教誨師となり北海道に渡る
・ 神田に出獄人のために保護所を設置，
その一生を社会事業に捧げる

② 原胤昭と手賀
・ 中世原氏の足跡が、胤昭を出獄人保護などの社会事業に向かわせたのではないか。

○「予が信仰の先祖は実に殉教者の巨頭ヨハネ・ハラ・モンド 」
『前科者はナゼ　又行るか』

○「一河の流れを汲む聖者
主水の血族胤昭を」

『隠れたる江戸吉利支丹遺跡』

③ 臼井原氏
- 原氏は千葉氏胤の庶子胤高（たねたか）に始まる千葉氏庶家。
- 下総国千田庄原郷を苗字の地とする
「代々家臣の長」
最終的な本拠地が臼井城（佐倉市）であったため、臼井原氏と呼称。

殉教者　原主水
- 名門の出として徳川家康に小姓として召しだされる
- 慶長5年（1600）頃、キリスト教に入信
- 額に十字の烙印を押され、手足の筋を切られたうえ追放。ついに元和9年（1623）品川で火あぶりに
- 原胤昭に大きな影響
- ローマ教皇庁より福者に列せられている

④　手賀への進出
- 関宿や古河にも通じた利根川水系
- 天文5年（1536），隠居した原胤隆が府川（茨城県利根町）で死去
- 印西（千葉県印西市）、そして手賀に
- 位牌や墓塔などの金石文史料 に登場
- 正泉寺瑩山禅師像に「天正5年（1577）施主　手賀城主　原次郎右衛門」

⑤ 手賀原氏の系図

胤栄⇒吉丸
↑　（主水）
胤高⇒胤清⇒胤貞⇒胤親⇒久胤⇒胤次⇒胤重⇒胤一⇒胤政⇒胤中⇒胤成⇒胤正⇒胤明⇒胤輝⇒胤豫⇒胤保⇒胤昭

手賀原氏三代

初代　胤親
- ✓ 興福院（手賀）や正泉寺などは胤親を「手賀城主　原筑前守」として奉る。
- ✓ 妻（月庵妙桂大禅尼）は府川豊島氏の娘。
- ✓ 戒名:天叟源清大居士

二代　久胤　31 歳で病死

三代　胤次
- ✓ 兄久胤の死後、原家を継ぐ。天正18年（1590）、小田原落城後板倉勝重の推薦により江戸町奉行島田利正の与力となる。
- ✓ 元和七年（1617）手賀の原家墓所に両親の供養のため、五輪塔2基を造立。
- ✓ 戒名:耕安本秀居士

⑥ 手賀に残る原氏の遺構

手賀城址
- 手賀城址（手賀字下ノ坊ほか）は、手賀の集落がある台地全体に広がっていたと考えられる。石碑の建っている畑地が主郭（本丸）で、東側には土塁が残り、北端にある稲荷神社からは間近に手賀沼を望むことができる。

興福院
- 南側の興福院（真言宗）の付近は二郭（二の丸）。

お墓場
- 胤昭と出獄者の墓

⑦ おわりに
●『四州真景図巻』
（渡辺崋山）

「手賀島々中　千葉家老備前守代々墓アリ　寺アリ」

＜原氏墓所にて（2010 年 11 月）＞

＜手賀城本丸跡にて（2010 年 11 月）＞

郷土史の窓

手賀沼のウナギ漁と「うなぎ道」

森　伸之

◆今では貴重なウナギ

今から 30 年程前、阪神間に住んでいた時に、神戸に丸高という有名な鰻専門店があって、休みの日など神戸の地下街の一角にある店に時々食事しに行っていました。　当時鰻重が 2 千円もあれば食べられたと思いますが、今はだいぶ高くなっています。

＜少なくなった国産ウナギ（八千代市）＞

ウナギは遠くマリアナ海溝辺りで生まれ、数千キロメートルもの大回遊をして日本にやってくるらしいのですが、四万十川や色々な河川にのぼってきて、昔からウナギ漁が行われてきました。近年、稚魚であるシラスウナギの漁獲量は年々減少、二ホンウナギは、今や絶滅危惧種に指定されて、特に天然ものは少なくなっています。

◆手賀沼のウナギ漁

実は手賀沼では、かつて天然のウナギを様々な漁法で獲っていました。

その手賀沼のウナギ漁のいろいろを紹介すると、以下のようなものがあったとのことです。

ソダ置き:

束ねた粗朶（ソダ:木の枝）を沈めておく漁。

翌朝ソダを水面まで引き揚げると、隠れていた大小のウナギがとれるという原始的な漁である（単純であるが、ウナギを傷つけないという利点がある）。

タカッポ:

1mほどに切った、節を抜いた竹筒を沈めておく漁。

ウナギの習性で、筒の中に入りこむので、引き揚げて捕獲する。

ウナギダル:

口径15cm～20cm、長さ75cm～1mほどの大きさの竹ひごで筒状に編んだ、「どう」、「ず」等と呼ばれる仕掛けを使う漁。

竹で編んだ筒は、外から容易に中に入ることはできるが、入り口に漏斗状の返しがついていて、一旦内側に入ると出ることが出来なくなる。

春から初夏の沼に上がってくるウナギ（デウナギ）、8 月末の海に降るウナギ（クダリウナギ）を獲る。

置きばり:

釣り針に餌を付け置いておく漁。

ウナギ鎌:

ウナギを「うなぎ掻き鎌」という特殊な漁具で引っかける漁。

沼の水面からウナギの呼吸穴を探し、潜んでいるウナギをからめとる（ウナギのどこかにからまって巻きついてくる）、冬眠中をねらう冬場の漁。

＜うなぎ掻き鎌＞

＊うなぎ鎌、うなぎ掻きともいう
画像は兵庫県漁具図解－「鰻掻構造并使用図」より

◆「うなぎ道」について

昔から手賀沼では漁業が行われ、沿岸の古代の遺跡から漁で使う土錘が発掘で見つかったりしています。

手賀沼の特産物はウナギのような魚介類や水鳥などで、特に手賀沼で捕れるうなぎは、色が黒く、肉質が繊細で焼いても身が縮 まず脂ものっているため、昔から「あお」とか「黒鰻」としてと呼ばれて珍重されました。

そこで、手賀沼や利根川でとれたウナギを江戸に輸送することがさかんに行われました。 手賀沼で捕れたウナギは呼塚河岸で、利根川方面のものは布施河岸で水揚げされ、江戸へ運ばれました。 そこで使われた陸路を「うなぎ道」といい、呼塚あるいは、利根川の布施河岸から松ヶ崎、高田を通り、現在の流山市の江戸川沿いの加村河岸まで、ウナギを陸送しました。

これは、印西の平塚河岸から白井を通り、松戸にいたる鮮魚（なま）街道とともに、江戸時代からの重要な物資（主に鮮魚）の輸送路で大江戸の台所を潤しました。

手賀沼産のウナギは、呼塚河岸から篠籠田、高田を通り、駒木、野々下を経て、流山の加村に運ばれました。高田から豊四季の諏訪神社の辺りを抜けて、流山の加村まで行く訳です。

布施河岸からのものは、利根川の沼地でとれたウナギ、鮭などとともに、鬼怒川や小貝川上流から運ばれてきた穀物なども、布施河岸で荷馬に乗せて 15Km の陸路を約4時間で流山の加村河岸に運んだそうです。

加村河岸からは、江戸川の舟運でそうした荷物を江戸へ送りました。

この「うなぎ道」は布施からは、須賀神社の近くを通り、松ヶ崎の一本杉を抜けて、高田にいたっております。高田から加村までのルートは、呼塚河岸からのものと同じです。

その加村までの途中にあった休憩場が、高田の水切り場で、ウナギを生簀にはなして生き返らせるとともに、荷馬を休めました。

そのウナギを江戸まで生きたまま運ぶためには、陸送している間も何度かウナギを水につける必要があり、それで水切り場のような工夫がされました。

＜高田水切り場跡付近＞

写真は、現在の柏市高田の水切り場跡付近を撮ったもの。 近くに水切り場の解説の看板があります。

何の変哲もない交差点になっていますが、写真右側向うの角の店附近に湧水があり、その辺が水切り場で屋号が「水切り場」という家が今もあります。

なお、この街道は諏訪神社への参詣者が往来する道でもあったため、諏訪道とも呼ばれています。

（参考文献）
『房総の街道繁盛記』山本鉱太郎・著（1999）崙書房ほか

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報
2021 年 3 月 31 日
第 44 号

松ヶ崎城の御城印ができました

最近の城ブームは、千葉県下の城郭も巻き込み、大滝城、佐倉城、本佐倉城といった城だけでなく、多古町の少し地味な城郭についても「御城印」が作られ、ついに松ヶ崎城のものもできました。　道の駅しょうなんの事務室などで販売しています。　御朱印帳が流行っていましたが、最近は御城印を集めるのがブームになっているようです。
なお、このデザイン制作や解説をしたは、「山城ガールむつみ」こと、宇野睦さんです。

＜松ヶ崎城の御城印＞

２０２１年度総会、講演会について

新型コロナ感染拡大のため、様々な活動が制限され、昨年度の総会は書面開催、講演会も 10 月に延期となりましたが、
2021 年度は以下の通り開催しようと思います。

日時：2021 年 5 月 23 日（日）
　　13 時 30 分　～　総会
　　14 時 15 分　～　講演会
場所：柏中央公民館　5F　講堂
講演会テーマ：
「千葉県北西部の戦争遺跡と戦時下の生活」
講師：森　伸之（軍事史学会会員）
その他：会場付近に駐車場はあります（有料）。新型コロナ感染予防のための配慮をお願いします

お知らせ

＜『水辺の城』第５号発刊について＞

第５号を 2021 年５月には発刊すべく、営為作成中です。　なお、第４号は城郭研究者セミナーなど頒布する機会が減り、残部がまだかなりあります。

＜会費納入のお願い＞

なかなか講座等への出席ができず、会費未納となっている会員の方もいらっしゃると存じます。　なるべく早めに会費納入をお願いします（下記銀行口座への振込など）。

＜原稿募集＞

紀行文や写真、イラストでも、地域の歴史、自然に関わることであれば、何でも結構です。
Ｅメールの場合は info@matsugasakijo.net まで。　紙の原稿を役員に託されても結構です。

手賀沼が海だったころ
手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報　第 44 号　2021. 3 31
編集・発行人：森　伸之
年会費 2 千円　振込先：千葉銀行　柏支店　普通　口座番号３４６１４７５